

浄土

1991-3

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回（一日発行）
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授受記録誌） 第三五号
平成三年三月二十五日印刷 平成三年三月一日発行
第五十七卷 三月号





三月の秀句

風よけの鳴く音にあをき三月菜

篠田悌二郎

春分のおどけ雀と目覚めけり

星野麦丘人

山の端に宝珠のまるき彼岸かな

阿波野青畝

三月号



ただ一向に往生を決定せんすれば
こそ、本願の不思議にては侍べ
れ。

——『念仏大意』

目次

——彼岸会法話——

小豆の莢……………成田光俊……(2)

(な)(む)(な)(む)(カ)(メ)(ラ)(3)

タンポポを写す……………ぬのむらてつや……(10)

読者のページ

力ある上人領解を……………大橋賢一……(19)
——選択集に聞く——

《寄稿》

あきらめる……………吉田勇之助……(29)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話)〔2〕彼岸参り……………(17)

季語やぶにらみ (1)

……………木下隆一……(33)
木枯・料峭——反戦句を読む——

◇◇連載・話の旅(八)◇◇

超常物語 ⑤……………松浦行真……(41)

表紙絵 小林治郎画

小豆の莢



なり
成 田 光 俊
た こう しゅん

(横須賀市専福寺住職)

年に二度づつ訪れてくるお彼岸を、物心がついてなんと迎えたことでしょう。が最近、はるか遠い想い出ですが、子どものころ彼岸になると小豆のご飯をたべたことが、奇妙によみがえってきます。

戦中でしたが、畠に取りに行った小豆を、莢ごと庭に干しておく、太陽の光をいっぱいすい込んだ莢は、中から小さな実をはじき飛ばします。実のなくなつた莢は、さも「私のお仕事は終りよ」とでも言わんばかりに、身をくるくるとまわめてしまいます。そんな光景が不思議に想い出されて、懐かしい思いがします。

丁度その頃、誰れに聴いたものかはっきり覚えていませんが、こんな言葉を耳にした記憶があります。

「入りばた餅の明け団子なかの中日あづきめし」

この言葉は、お彼岸さんを迎える時になったら「せめてご先祖さんに一口でも、目でも味わってもらいたいと、その家の主婦が手を真赤にしてお台所でおはぎを作っていた姿を臉に浮かべ、昼と夜とが半々になるお中日になると、みんなの幸せを願って、お祝の小豆のご飯を焚き、終りの日には、持って帰れますようにとお団子を作ったんだよ」と、語りかけているような気がします。それは私たちに夢をあたえ、先き立った人たちと残った人たちとの暖かい心のふれあい、いつの日か自分も旅立つであろう時にも、同じようにしてほしいという、淡い期待が入り交ったものだと思いますが、いつの間にか、土地柄によって多少の違いはあるものの、独特な習慣になっていきつづいています。

この習慣も、世の中の画一化の波に洗われて、いつしか失なわれそうです。お彼岸の供えものも、入りから明けまで、三角の型をしたお団子で、どこ家庭のも色と固さが同じように思えます。おはぎも出来合い、なにか味けなさを感じます。

このような変化は人々の心にも現れるようで、数年前になりますが、知人から頼まれてご主人を亡くされた方の彼岸回向に向った時のことですが、仏壇の前に行つて啞然としました。なにしろお花もいつ供えたものか、ドライ・フラワーになつていますし、お水を供えたと思える茶碗は、埃りがたまつています。内側は真黒くなつています。物置きと間違えられそうなお仏壇を、掃除してからでないとお回向ができないのです。その時、独り言のように語つていた言葉によりますと、「亡くなられた人が出て来そうで、仏壇に近づくのが恐くてしかたがない」のだそうです。そうでしょう、あまりにもひどいので涙が出たのを憶えています。

先立つた方々と私たちのおつき合いには色々とおあるようです。お墓にお参りに来られ、何と語り合つてゐるのか、墓石の前で長々と話をされてゐる方、何度も何度も水を流してお墓を洗い清めてゐる人がいるかと思えば、花を供え早々に帰られる人などさまざまですが、時間さえかければ良い、ということでもなく、大切なことは、真心をこめてお参りするかどうかです。

お供えをすることを、仏教では供養という言葉で現しています。これは字の通りで、養うために供えるという意味でしょう。その「養う」に二通りの考えがあります。一つは、亡くなられた方が、いまでもここに住んでゐるのだ、という心で

お供えをされること、それは「彼の地で安楽にお過し下さいと」念じつつ先き立った人に真心からお供えすることです。その心が続けてゆくと、自然に二つ目の、自分の心が、正しく明るく育まれていくのです。

お彼岸のお供えにしても、手を赤くし、帰られる人を気づかい、みんなの幸せを願いつつ作られるものは、心にはのぼのとした暖みを持って生きつづけているのです。はたしてどこにも供えられている三角のお団子は、どうでしょうか。

それにしても、最近のニュースは暗いものが多く、特に中東での出来事は悲しいことです。私たちは口で平和、平和と叫んでいます、**「真の平和とはなんだろう」**と、考えさせられることがあります。

私たちは頭の中で平和を願いつつも、マハトマ・ガンディが行ったように、自分をすてての行動力で、それが出来る人がなん人もいるでしょう。出来ないのが人間なのかも知れません。自分自身を防御するだけで、精一杯なのが本当の姿のように思えてなりません。

「いのち」を受けたものが、お互い助け合い協調しあって、過ごさせていた

くのが平和の原点だと思います。にもかかわらず、先日テレビの画面に、真黒くなった鳥が息たえだえの姿で写っていました。ペルシヤ湾に流された石油の犠牲です。流された規模は、東京湾がすっぽり入るほどの広さだとも言われています。それほどの広さの中で、犠牲を受けたのは鳥だけではなく、多くの「いのち」が、人間のエゴによって失なわれたことになります。それだけで終らずに、いまでもなんの罪もない「いのち」が、奪い続けられているのです。それは長く続き、一説によれば二百年にも亘るといわれます。このようなことが許されてよいとは、決して思えません。

平和だ、幸せを願っているよ、と語りつつ、その裏ではなんの罪もない「いのち」を、エゴで殺して平然としているのは、人間だけでも知れません。そしていつの間にか、自然に対してさえもエゴの牙を向けているのです。

自然への冒どくは、私たちの廻りにもあります。山が崩れそうだ、崩れたら困る、そんな美名のもとに、昨日まで「緑があつていいね、良い山ですネ」といつていた人々が、なんのためらいもなく山を崩し、マンションを建てています。そのマンションに住んだ人達は、隣りの山を崩さないで、自然とみどりを私達の手で守りましょう」と市民運動を起しています。市民運動を横目に、可哀相にいま

までの住み家を取られた鳥たちは、あちこちと行き先を探しまわっている。反動を受けた動物の中には、急いで道に出たために車にひかれて命を失ったものもいます。

いままで保たれてきた自然や他の動物たちとの協調協和を、一方的に破ってしまい、そこには虚しく「豊かな人間都市○○」と書かれた広告が建っています。

平和といい、豊かな人間都市の建設にしても、その基になるものは心です。

豊かな心を育てることが大切で、そのためにも、お彼岸さんは欠かせないものです。生れながら持っている心は、成長とともに悲しいことですが、自然に煩悩という雲が、かかってくるのです。それはまるで、お彼岸の時に私たちの幸せを願って食べた小豆が実をつけた時に、青い皮で出来た莢に包まれているのと良く似ています。

莢は目に見えるだけ分り易いのですが、心の雲は見えないだけやっかいです。まさか自分の心に雲がかかっていると思わないからです。雲があることを、信じないからです。そうするうちに、雲は段々と厚くなってしまい、いつとはなしに

自分中心の考え、自己中心的な思考、エゴが優先するのです。

口で平和だ、幸せだ、人間都市だといいながらも、いつしかエゴが優先して、自然を破壊し、弱い動物たちを一瞬に追い出し、さも自然の偉大さ、恐しさをさえも征服出来るという錯覚におちいつてしまうのです。いつの日か私たちの前に、巨大な力を持った自然が色々な形で現れてくる可能性が多いように思えてなりません。

ペルシヤ湾に石油を流したために、山を崩したために、その巨大な力の前に屈せられる時があるかも知れません。それは私の時代でなければいいんだ、そんな考えがあるとしたら、悲しく、許せないことです。

小豆の莢が太陽の光りを受けて、中の実をぼんと飛び出さしたように、私たちは、お彼岸さんに、真心をこめたお供えをしながら、美くしいエゴのない彼の地を思い、ご先祖さんに一心に念じていると、心に仏さまの光が照らされ、いつとはなしに、中から真の心が現れてくるのです。

お彼岸さんを迎え、仏壇をきれいにするとともに、心のこもったお供えをしながら、小豆の莢になったつもりで、仏さまの光をいっぱい受ける時にしたいものです。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

なむなむカメラ (三)

タンポポを写す



ぬのむらてつや

どこまでもつづく道の両側に タンポポの

行列ができました。それは女の子のセーター

のふちどりのようにも見えますし 地球をと

りまく花かざりのようでもあります。

「えーい こんなのちっともきれいいじゃない

や」

けんちゃんは ぶりぶりとおこりながら
そのタンポポのむれを ふみつけているので
す。

ふみつぶされたタンポポが なにかいって
いるのも聞こえません。空にはヘリコプター
や飛行船が ブーンブーンと地面のものにお
かまいなく 地上では自動車がゴーゴーゴー
と 自分のことだけ考えて走りまわっている
のです。

学校から帰ってきたけんちゃんは カバン
をほうりなげると おかあさんになんにもい
わないで 友達の家にあそびに行こうとしま
した。あたらしく売り出されたテレビゲーム
をする約束をしたからです。

玄関の戸を音がしないように そっとしめ
て家を出ると そのまま友達のところへ走り
だしたのです。

ところがタンポポの道まできて気になった
のが やっぱりおかあさんに何もいわなかつ
たことです。いえば 宿題をすませてから
と注意され 行けなくなるかもしれません。
ゲームの用意をしまっている友達の姿も目
にうかびます。

こんなことは だれにでもあります。ど
うしようかといつもまようことです。でも
たいがい友達のところへ行くでしょう。そ
っちの方が楽しいですし おもしろいことが
多いものです。

しかし このまま友達の家へ行つて 夕方
に帰ってきたとき おかあさんにおこられ
ば ごはんを気分よく食べられそうもありま
せん。

友達との約束をやぶれば これから一緒に
テレビゲームもできなくなるかもしれません。
まるで けんちゃんのそばにはだれかがい
て 未来の写真をうつしているみたいです。

「どうしよう」

タンポポをふんずけていたけんちゃんは
おもいっきり足で花をけとばしました。つま
さが根もとの土をけずって

「アッイタター」

そして “なむなむ”。 そうなんです。けん

ちゃんのくせなのです。おとうさんもおかあ
さんも おじいちゃんもおばあちゃんもいっ
ていたのですから。こまったときや痛かった
ときにとび出すことばでした。

自分のことばにハッとして

「そうだそうだ。なむなむカメラがあつたっ
け」

ひかりに向つて “なむなむ” といいながら
シャッターをおすと たちまちカメラの中へ
すいこまれてしまうふしぎなカメラ。そこ
には かならず『ピカリのなむなむ』がまっ
いてくれます。もしかしたらどうしていいか
まよっているけんちゃんに 何かをおしえて
くれるかもしれません。

でも そのカメラは家の柱にぶらさがって
いて ここにはないのです。いまさら取りに
いくことはできません。

「しょうがないなあ。こんなときにカメラが
あればこうやって なむなむといいながら
ひかりに向かつて——」

けんちゃんは カメラを持ったつもりで
さっき けとばした花に向ってシャッターを
切るまねをしたのです。

ピカッ！

タンポポの花が太陽になって光りました。

まるで怒っているような強いひかりです。

たちまち けんちゃんのからだは すいこ

まれるようにカメラの中へ入っていました。

「やあ 久しぶりですね」

あまりのおもいがけないことに ぽかんと
立っているけんちゃんに ピカリのなむなむ
が声をかけてくれました。

「カメラがなくても ただなむなむといいな
がら花にむかってシャッターをおすと たち
まちカメラの中へ入ってしまう。そこがなむ
なむカメラのいいところです」

その話で やつとなつとくしたきんちゃん
のまわりが一段と明るくなりました。

カチャッ！

一枚の写真がうつります。

それをまたピカリのなむなむが説明してく

れます。

「これは道ばたのタンポポです。どこにでも咲いている花ですが、見る人には『ああ春がきたな、今年もお彼岸だな』という気持をおこさせます。石のあいだからでもコンクリートのすき間からでも 少しの土があれば いや土がないようなところでも 芽を出し葉をつけ花が開きます。ほらタンポポがしゃべっていますよ。」

『やっとお日さまに会えて “こんにちわ” とあいさつができた。こんなうれしいことはない。だって つぎのとき花をさかせられるとはかぎらない。長いあいだ暗いつめたい土の中でしんぼうしたかいがあった』っていつて

いるのですよ」

なんにもいわないとおもっていたタンポポが しゃべっているのです。

「ほんとうかなあ？」

「そうなんです。草や木や花も ちゃんと声を出しているんです。そら タンポポの歌がきこえるでしょう」

ピカリのなむなむにいわれて けんちゃん
は耳をすましました。

お日さまの ほかほか光は あたたかい
おかあさんの手の中 おむすびのように
むしゃむしゃ 口の中まで あたたかい
空からふりそそぐ 雨のしずく

つめたいけれど 土の中

ほかほか玉子 ゆであがる

ほんに ほかほか ゆで玉子

それは春のお日さまのように あたたかい歌でした。土の中の虫たちが 外へ出たくなるような声でした。蝶がとびまわりたくなるような しらべでした。

けんちゃんのお腹は おむすびとゆで玉子という言葉をきいて ぐうぐう鳴ります。

なむなむカメラは ちよっとした音でも けっして聞きもらさないのです。

カチャッ！

つぎの写真がうつります。

そこにいるのは けんちゃんのおかあさん。台所で何かをいっしょうけんめい作っています。ゆげのあがつているほかほかのおいもをすりつぶして スイートポテトをこしらえているようです。けんちゃんが一番好きなものです。

それなのに おかあさんのようすが なんとなくおちつきません。柱時計を見たり 手をやすめては ひとりごとを云っています。

「けんたは どこへ行ってしまったのです。う。お腹もすいているだろうに。交通事故にあわなければいいが。なむなむなむ」

「ほらほら おかあさんがあんなに心配しているよ。ここからでもいいから早く無線電話

をして安心させてあげなくちゃあ。ついでに友達のところへも」

ピカリのなむなむにいわれて けんちゃん
の顔は ほかほかポテトのように にこにこ
と太陽みたいにあかるくなります。

「なむなむカメラは すばらしい。見えない
ものが見えるんだ。聞こえない音がきこえる
んだ。だから何でもわかるんだ。どんな宿題
でも すぐにできてしまうだろう」

と 宿題のシャッターをおしたのですが
カチャッ！

顔を黄色にそめてタンポポの中に立ってい
るけんちゃんです。

「ふんずけたり けとぼしたりして ほんと
うにごめんね」

しゃがみこんであやまるけんちゃんの耳に
タンポポの声は 二度とかえってきませんで
した。

数日後 一枚のハガキがとどきました。

『タンポポのうたは ただ 聞こうとして
も 聞こえない あっちの声と こっちの
声と あったかい声と あったかい声と
ひびきあい かさなりあったとき』
それは たしかにピカリのなむなむの字で
した。

(つづく)

ひ と く ち 俳 話 (2)

彼岸参り

勝崎裕彦

弥生三月は春の彼岸の月である。春の山は遠く霞たなびき、春の川は雪解けの水を集めて満々と水温む。ものみな芽吹く新しい活動の 때가、彼岸の季節の頃である。暖かさも一段と増して、やわらかい風を呼ぶ。彼岸の寺参り、墓参りは、こうした時候のほどよい頃合いを受けている。彼岸寺のおだやかなたたずまい、彼岸道にはきびしかった冬の寒さから解放された老若共々の善男善女の彼岸姿がある。

信濃路は雪間を彼岸参りかな(也有)

彼岸参りに家族揃っての参詣はなによりもなごやかである。一家団欒の光景は、まわりの人々の心をも暖かくする。墓前に拝して瞑目合掌する年寄りに倣って、幼なき子供がかわいいい手をしっかりと合わせる。その小さな掌の中に、おじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんのはるかなる願いがこめられる。すこやかに、あかるく育ってほしい、と。「彼岸の帰路約束の子を肩車」(衛)、墓前に供えられた花々も、立ちのぼる香煙も、そして今は亡き多くの精霊みたまも、この家族の和気藹々の後姿にいつくしみを寄せることである。

老いも子も心寄せ合う彼岸道(裕彦)

△日本図書館協会選定図書▽

『江戸物語』

細田隆善△豊明▽著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本が好評増刷——

●四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録／定価一八〇〇円

【付：名所史跡・資料館案内】

江戸は全国総城下町

江戸は世界一の人口

江戸は日本の縮図

江戸で日本の富の半ばが消費

江戸文化の出現

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一

電話(〇三)三二六九―一二九三・三二六七―六六三七

振替(東京)七―一一〇九三／千一六二

力ある上人領解を

— 選択集に聞く —



おお
はし
けん
いち
大橋賢一

山崎正和氏にはたしかにそういう点があるかも知れぬ。「しかしそれでも、美の基準として平衡の支点が探られなければならないのではなか」と、西部邁氏

は言う。西部氏にはこのように、現実認識と共に、「基準・支点」という、いわば理想の領域にあるものを見つめている。それに対し、山崎氏には、非常に的

確かつ柔軟な現実認識を感じるけれども、理想面がどこか稀薄であるため、これも非常に的確に西部氏が批判しているように、「山崎氏の健康な常識（コモンセンス）も、残念ながら「遊びの小児病化」に耽っている現代の病める共通感覚（コモンセンス）を正当化する論理に変質してしまうであろう」と、山崎氏の現実認識が、逆に現実の病理に解消してしまう危険性があるのだった。

数年来、私は西部邁氏の文章を好んで読む。そこには、現実認識と共に理想への爽やかな視点がある。たとえば、前に引いた文章の直前には、こういう表現が

きている。「自分の身分において、共同体のなかにその場を与えられていると感じられるような、自分じしんを自分じしんと感じることできるような、そのような高貴なる奉仕の関係」（ホイジンガ）があってはじめて、「善と悪とを確信をもって区別する」ということが可能になる。そのような関係は「新しい禁欲」を要請するのであるが、「新しい禁欲は……至高のものと考えるべきものへの献身」だというのである。ホモ・ルーデンスの人間観はこのように緊張した宗教感覚および道德感覚のうえに組立てられたものである」と。

引用が長くなったが、この文章、全体と部分、善と悪という二面性を認めつつ、自分という部分を共同体に奉仕させること、悪を善に改めていくことが理想であるとして、それに至る方法としては、禁欲、即ち、至高のものへの献身——これは、禁欲するには、その目的たる理想への観点がなければならぬということであろう——を要するということであろう。そしてこれは、確かに道徳と宗教なしには考えられぬところであろう。こういう見方においても、私は西部氏の所論に傾かれるのである（西部邁氏文「山崎正和氏への疑問」より）。

さて、私は、法然上人の「選択集」に還るばかりである。そしていつのころよりか、そこに阿含經の文、「相依性・縁起の理」あるを認めるに至って、法然上人が無理なく釈尊と結びついたのであった。その意味において、まさに「わが大師釈尊は法然上人」（聖光上人）なのである。

そして、この「選択集」の原理たる縁起・相依性からすれば、聖道と浄土、念仏と諸行、ことに戒律と念仏の關係、一念と多念の問題など、悉く無理なく解け

るのである。さらにすばらしいことには、その問題解決も何も、すべて「選択集」の文に全現しているのである。まさに「学問は選択集に過ぐべからず」であるなあと思う。

しかるに、わが浄土宗門——というより、浄土宗義の衰微、とあえて言おう。

その力のなさはどうだ。浄土宗学の復興の気運は感じる。旧態依然たる宗学に近代化の風を——その期待もわかる気がする。まず今生きている我々に理解のできる宗学を……しかし、これはひょっとすると本末転倒であるかも知れない、と私は思う。宗学を現代に近づけることよ

り、現代を宗学に近づけることのほうが、根源的なのであるまいか。それくらい宗学尊重がなければ、宗教とは言えぬのではあるまいか。宗教とは、まずもって宗（むね）とする教え、胸であたためるほどの尊重なくてかなわぬ筈である。

西部氏の論述に頻出するトラディション（伝統）には、そういう根源的高貴さへの思念があると思うのである。

浄土宗にもどれば、現代の諸問題を「選択集」に問うべきだと言うのである。そこには先述したように、仏教の開祖釈尊に還帰する周到にして柔軟な宗教領域がある。この普遍的な世界を前にし

て、解けざる問題などない筈だと言いたいのである。この普遍性を前にして、上人の「選択集」は八百年前のもの、現代の複雑な問題など解けるはずはない、と或いは言うであらうか。しかしそれは、これもまた不遜な考え方であると言わざるを得ないのである。「普遍」ということの何たるかを知らないものの言と言わざるを得ないのである。

そこで、私は、次に一つの文章を引例しながら、上人の「選択集」に確立されている普遍性を見ていこうと思う。その

文章、藤吉慈海氏の「浄土宗学即今の課題」。これこそ、浄土宗義の衰微を嘆く私にとって、願ってもない主題なのであるから。

まずはじめに「教学は現実の問題とかけはなれた教義の研究に終始し……」とある。先に述べた宗学と現代の問題が提出される。そして、宗学の現代化は、一面、大切なことであり、法然上人の視点の一つも、その「時機」にあったことを想起すべきであらう。「選択集」における現実観も、確かに特筆されているところである。

たとえば、第三・本願章には、「もし

それ造像起塔をもって本願とせば、貧窮困乏の類は定んで往生の望みを絶たん。しかも富貴の者は少なく、貧賤の者は甚だ多し。もし智恵高才をもって本願とせば、愚鈍下智の者は定んで往生の望みを絶たん。しかも智恵の者は少なく、愚痴の者は甚だ多し」とある。

思うに、いかに現代といえども、富貴のブルジョワは少数であり、エリートは文字通り選ばれた人なのである。これは、古今かわらぬ現実のすがたといえるであろう。しかも、「当今は末法、現にこれ五濁悪世なり」(第一・二門章中の引用文)で、「浄土の教、時機を叩いて行運

に当れり」(第十六・総結文)とは、今の時機を念頭に置くべきこと、また当然なのである。法然浄土教において、かかる現実主義は、肝要とすべきテクニカルタームなのであった。

しかし、一方、こと宗義の問題となれば別であると思う。その意味で、「宗学が宗祖の精神を基本として、その時代時代にふさわしい開顯のしかたをするもの」との藤吉氏の指摘は頷かれるのである。伝統的な基本精神を受けながら、その時代特有の思想環境に合わせてゆく、いわゆる領受開顯の姿勢は必要なことでもあろう。したがって、善導・法然の二祖か

ら、聖光・良忠、中興の位置に立つ聖岡・聖聰を経て、近代の光明主義や共生会に至るまで、各々の時代に応じた開顯がなされたであろう伝統観も頷かれ得る。

ただ、その最も基本となるべき宗祖法然上人の思想・信仰について、もしかりに誤った受容がなされていけば、ことは重大である。そこまでに至らずとも、もし「選択集」の領解において、上人の著にふさわしい深みをもって行なわれていないとすれば、この浄土宗学は、まさに力と情熱のないものになりおおせてしまふであらう。私にはその危惧が感ぜられてならぬ。

例えば「往生浄土」の理解について、藤吉氏は言う。「法然上人の場合でも、その深い宗教的体験の世界とその表現との間にはかなりのへだたりがある」とされるが、この見方をおしひろげていけば、主著たる「選択集」には、まだ充分な上人の宗教的体験が表わされていない、ということにならざるを得まい。もちろん宗教的体験は筆舌に尽くし難いものであるに違いはないとしても、こういう見方は、あまりに言語表現を軽視するものではあるまいか、という思いが一方です。言語表現に辛うじて書き留められた宗教体験ゆえに、表現に沿いつつ、

しかもそれを超えて、その根源に浸透していくのが素直な道ではなからうか。さすれば、その表現こそ、得もいわれぬ深甚微妙のおもかげを投げかけてもくるのである。

「極楽は無為涅槃界なり」(第十三・多善根章)の文字は、しかし、大乘思想のみをもって領解すべきでないであろう。なぜなら、「選択集」では、大乘も批判されているものの一なのである。第一・二門章「およそこの聖道門の大意は、大乘および小乗も論ぜず。この娑婆世界の中において、四乗の道を修し、四乗の果を得るなり」と確かに規定され、それに對

して淨土門は、淨土に往生する教えだとされるのである。すなわちこれは、聖道、特に大乘は「現實肯定」の教えであるが、淨土門はそうではない、「現實否定」の教えなのだということである。

これはしかし、仏教として最も肝要事ではないか。即ち、仏教は現實否定の教えである。無我の教えであり、寂滅涅槃への教えなのである。その意味で、「無為」は安易に「無為自然」に結びつくべきではないのであった。自然のありのままでは、現實否定の無我の出できようがない。自然外道といわれるゆえんである。親鸞の「自然法爾」は、無為自然に

流れる危険性大であるとする者である（ちなみに法然上人の「法爾道理」説は、念仏して往生することにおいて法爾なのであって、称名念仏をぬいていない）。

称名念仏なき信心は、迷う心を把握できずに、結局は「こころは遠く去りゆき、またひとりうごく」（法句経）ままに、いつしか現実解消していつて、さきに述べた自然ありのまま、現実肯定に結びついてしまは。「衆生障り重く……識廻り、神飛んで……」（第三・本願章）は、観念化し、浮き上がってしまうことを述べているのでもあろうか。

ことほど左様に、「選択集」の真精神

は忘却されている。真精神とは縁起・相依性だ。その極は、絶対と相対の相対（相依）であり、相対的現実の絶対化という、円熟した縁起も忘れてはならないであらう。

しかし、絶対が相対化されていることを閑却すべきではない。したがって、聖道批判も絶対的に固執すべきではないのであって、その点も「選択集」第四・三輩章には、聖道といえども異類助業として認容されている。もって法然上人の周倒を思い知るべきである。

（了）

◇ 好評の仏教文学 ◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL (03) 3311-0311

《寄稿》

あきらめる



よし だ ゆうのすけ
吉 田 勇之助

仏教文化講演会のような集会に参上した折
講師の方が開会前に三帰依文を独誦される。
「人身受け難し、今已に受く、仏法聞き難
し、今已に聞く。この身今生に向って度せず
んば、さらにいづれの生に向ってかこの身を
度せん。大衆諸共に至心に三宝に帰依したて
まつるべし。……」を拝聴する。そして「こ
の身今生に向って度せずんば、さらにいづれ
の生に向ってかこの身を度せん」のところに
至るといまだに己れの反省、工夫の不充分さ
がはっきりわかってきてなさけなくなり、あ
せりをおぼえる。生物であるわれわれ人間は
いづれ死んでいかねばならない。人々は「死」
という言葉を不吉として口にするのをさけて
いる。死後の世界の存在は肯定することも、
否定することも出来ないが、死とは何か、生

とは何かということはいつも考えている。そして、死そのものに対する恐怖や、知ること不可能な死後の世界についての不安感が、時々、不図意識の上に出てきて悩ます。ただ見つめているだけでどうしようもない。

ご縁があつて宇宙的大生命とも申せる流れの上に泡のように浮かび上がっているが、ご縁が尽きれば消えてもとの流れの中に戻っていく。これが死だと思っているが淋しさはとり除けない。長年こういうこだわりというか煩惱の中に閉じ込められている。死後、地獄へ落ちるとか極楽へいくというような考えにはどうもついていけないし、理解できない。

しかし、「浄土とは何であるかといえれば大悲の智慧の境地（金子大栄師）」、「浄土は精神の王国である（曾我量深師）」などというお言葉

に接すると、次第に納得理解ができてくる。

「ある死生観」という題で増谷文雄先生が執筆された中に、友人の宗教学者であり十年間ガンで苦しめられた岸本英夫博士と、はなしを交わされたときの一節に——「それじゃ極楽いくとかなんとかいうあのかんがえかたはなんだ」ともうしますから、「あれは業の相続だよ」といったら、それでスットわかった。かれはあやまちがあやまちとしてスットいわれるのです——に読みいたった時、先生のお答えから大きな感銘を受けた。

「ウダーナヴァルガ」の中で、釈尊は業というお言葉をもつて教えられているところがよく出てくる。その一つに、「人がもしも善または悪の行いをなすならば、かれは自分のした一つ一つの業の相続者となる。実に業は

滅びないからである」とある。

釈尊は哲学すぎな若い弟子が出した「人間は死後も存在するのか、せぬのか、靈魂と身体とは同一なのか……」等の形而上の問題については、戲論なるものとして、お答えをしておられない。「われらはこの現在の生において、この苦なる人生を克服しなければならぬ。……わたしの説かないことは説かないままに受持するがよい。わたしの説いたことは説いたままに受持するがよい……」と教えておられる。

釈尊の教えである本来の仏教は、死後や来世のことを説いているものではないことが誠によくわかる。明確な、そして何人も容易に理解できる釈尊の教えは、心のよりどころになり誠に有難いきわみである。人間として此

の世に生を受け、しかも仏法を承わるご縁にめぐまれたからである。

けれどもなお、知ること不可能な死後の世界に対する恐怖感、死のことを解決出来ない淋しさはどうしようもない。

「あきらめる」という言葉を国語辞典で見ると、ふたとおりの意味のことが併記してあった。「明らめる」——あきらかにする、さとする。「諦らめる」——いちど思ったことをやめる、思いきる、断念するとあった。

煩惱に執着しているこの愚かさを、四十年程前に「煩惱に追わる姿や走馬灯」と作句して反省したこともある。こだわり続けている思いを断固打破し、死を見つめ、のりこえていく諦念というのか、諦観と申すのか、あきらめの思いが育ってくるようになった。

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊誌『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にもにも遺漏が多く、また校正のミスも相変らずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることではありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後も少しづつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上のお願いもできにくいことではありますが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げます。なにを隠しましょう、一ページ、ポッカリあいた埋め草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

季語やぶにらみ (±)

木枯・料峭——反戦句を読む

木の きの
下 した
隆 りゅういち
(随筆家)

海に出て木枯帰るところなし 山口誓子
という句が反戦の句であったと知ったのは、
つい最近のことである。

栄光ゼミナールという学習塾が発行してい
る「栄光通信」に、その記事は載っていた。

作家の森玲子さんの、原稿用紙二枚足らずの
短いエッセーがそれである。「栄光通信」は
一種の広告には違いないが、多色刷りタブロ
イド版八ページからなる立派な作りのもので、
これまでも毎月一回朝刊に折込まれて配達さ

れてきたが、目を通したことはなかった。我が家に学習塾を必要とする年頃の子供がいなかったからである。それが今回に限って目にとまったことに、私は運命的なものを感じるのである。

その時はまだ湾岸戦争の戦端は開かれていなかったが、やればイラクの敗北は必至であり、いくら科学の粋を集めたハイテク戦争といえども、所詮は人と人との殺し合いであるから、イラク軍は武器弾薬が払底すれば、最後には特攻隊を出さざるを得なくなるだろうと私は思っていた。多分それはアラールの神の思召しという大義名分を掲げて行われるであろうが、多くの若い命が失われるのは目に見えているのだ。そのことは太平洋戦争の末期、僅か十ヶ月足らずの間に、二千五百三十

名もの特攻隊員を戦死させた日本の例を引くまでもあるまい。そして、その殆どが前途有為な二十代の青年であったことも……。戦争だけは起こさないでくれよ、という私の願いも空しく、この稿を書き始めた一月十七日の朝、突然多国籍軍のバグダッド空襲の第一報が飛び込んできた。

森玲子さんのエッセーを要約すると、

「木枯は木を枯らし、人の身をすくませる北風です。吹いて、吹いて、その果ては海に吹き出て……、いったいどこへ行くのでしょうか。帰ってはこれません。そう思うとかわいそうです。実はこの句には太平洋戦争で死んだ日本の若者たちを惜しむ心が隠されています。昭和十九年十月二十五日、フィリッピンの日本軍基地から出撃した特別攻撃隊の飛行兵た

ちは沖繩戦で大勢海の藻屑となって戦死しました。帰りの燃料が不足で、はじめから積んでいなかったのです。学生や若者たちでした。誓子は十一月十九日にこの句を作り、こう解説しました。木枯は行ったきり、もはや還って来ることはない。その木枯は、かの片道特攻隊に劣らぬくらい哀れである、と」

「海に吹き出た風の行方はわからないのです。おじいさんたちが若いころのことをたずねてみたら話してくださいでしょう。今日も北風の中を学校や塾に通う受験生のみなさん、元気で頑張ってください」

と、最後は心やさしい言葉で結ばれている。おじいちゃんたちに聞けか、記事を読んで思わず私は苦笑してしまった。まだそんな年ではないと思っていたからである。昭和十九

年、私は愛媛県立松山中学の一年生で、神風特別攻撃隊の戦果を報じた新聞を、総毛立つ思いで読んだ。指揮官の関行男大尉が愛媛県西条市の出身ということもあって、特別の思いがあったのは否めないが、当時松山基地の設営に勤労働員されて、海軍の小型飛行機には親しんでいたから、あの華奢な戦闘機の零戦が、重い爆弾を抱いてどうやって飛んで行ったのだろうと思うと、哀れでならなかった。関大尉は海兵出の、艦上爆撃機のベテランパイロットであった。なぜ艦爆のパイロットが不慣れた戦闘機で、自ら爆弾となって空母に突入しなければならなかったのか。それほど戦況は逼迫しているのか。いや、やむにやまれぬ気持ちから出た崇高な行為だったのだ、と様々な思いが脳裏を駆けめぐったが、なぜ

艦爆乗りが戦闘機で……という疑念は払拭できなかった。

「お父ちゃんの、西条中学の後輩なのね。新婚一か月で死んで、二階級特進して軍神になって自分はいいかも知れんけど、残された奥さんが可哀そう。結婚しなければよかったのにねえ」

他聞をはばかり言辞で、子供相手に愚痴っても仕方ないことであつたが、母には母の女としての感慨があつたようである。

私が特攻隊にこだわるのは、こんな下地があるからだ、正式な呼び名の「神風」^{とんぷう}がいつ「かみかぜ」に変わったのか、私は知らない。最初からそう呼ばれていたような気がするが、戦後「カミカゼ」と片仮名書きされて、多分に揶揄的に「無法」「無謀」の代名詞に

擬せられていることには、国の礎となった人たちに対して失礼じやないかと憤りを覚える。森さんの文章をあげつらう気は毛頭ないが、曖昧な記述は正しておかなければ、と思う。まず、十月二十五日、フリーッピンの基地を発進して沖縄戦で戦死したかの如き表現は適切ではない。十月二十日深夜編成された神風特別攻撃隊は、本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」の歌に因んで、敷島・大和・朝日・山桜隊と名付けられ、一隊六機（特攻機四、直掩機一、戦果確認機一）計二十四機で出撃し、レイテ島沖で敵機動部隊に突入した。但しただ一回の出撃で戦果を挙げたのではなく、二十一日から獲物を求めて索敵に努めたが発見できず、空しく帰投している。従って、決して片道燃料を塔載して出

て行ったのではない。飛行可能な機数がこれしかなかったのだから、虎の子の飛行機をむざむざと失うわけにはいかなかったのである。沖縄の攻防戦が熾烈を極めたころ、主に九州の基地から出撃した特攻機は片道燃料しか積んでいなかったという事実を、我々が知ったのは戦後になってからのことで、誓子が木枯の句を作り、「かの片道特攻隊に劣らぬくらい哀れである」と言った十一月十九日の時点ではその事実はなく、もし仮にあったとしても、軍の機密に属することを、一民間人が知り得たとは思えない。恐らく森さんは、戦後上梓された「山口誓子自解句集」のような著書から引用したのであろう。この「片道特攻隊」を、片道燃料で死地に赴いた特攻隊と解するか、往きがあつて還りのない特攻隊と解

するかは、読む人それぞれの感性に任すしかない。

この句は中学や高校の国語の教科書にも採られており、また受験参考書の多くは、この句の批評や解説を載せているが、ここまで立ち入って解説した書はまだない。それにしても木枯が特攻隊の隠喩であつたとは……。

反戦句としては、私は「某月某日」と前書きした中川宋淵の、

料峭りようせうの靈たまともならで兵帰還

という句が好きである。「料峭」は春風の肌にくすら寒く感じられるの言い、出典は蘇東坡の詩の一句「漸覺東風料峭寒」だと辞書に出ている。同じ題材を詠んだ渡辺水巴の、寒風や隊伍短き帰還兵

も、心引かれる一句である。どちらも生還

した兵を、おおつびらに祝福できないところが切ない。

歳時記をそのつもりで読んでいくと、採られている例句の中に、意外に反戦句が多いのに驚く。

帰り来て英霊に礼す冬早^{ひど}

石田波郷

英霊車去りたる街に懷手

〃

英霊に大寒の雲夕焼けたり

沢木欣一

路次深く英霊還り冬の霧

大野林火

傷兵にヒマラヤ杉の天さむさむ

横山白虹

わが馬を埋むと兵ら枯野掘る

長谷川素逝

日俘^{ひつぽ}われ雨氷の帽底深く垂る

佐々木有風

水虫や青春うけし軍靴の枷^{かぎ}

榎本冬一郎

むといった直截な句もあれば、

原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あ

ゆむ

金子兜太

戦死の蛆^{むし}如何に如何にと口を挙ぐ

中村草田男

という凄惨な句もある。原爆を詠んだ、

原爆図中口あくわれも口あく寒 加藤楸邨

原爆地子がかげろふに消えゆけり 石原八束

は、単なる囑目吟として捉えるのではなく、

原爆犠牲者への鎮魂句という観点から読まれるべき性質の句であろうか。

俳句は作者の手許を離れて衆目に曝された

時から、独り歩きを始める。そのため、どう

批評されようとも言訳は許されない。悪評も、

作者の意図しなかった誤解も甘んじて受けな

ければならない。つまりは貴方任せなのであ

る。個人の句集だと、作者の人柄や意図する

ところ、その句の時代背景などはある程度分

かるが、歳時記の例句からそれを読み取るの

は、殆ど不可能に近い。誓子の木枯の句が
いい例で、作者の解説なしではどんなに深読み
しても、木枯から特攻隊は浮かんでこない。

料峭の句にしても、確たる月日をあかせな
かった「某月某日」という前書きが、素直な気
持ちで帰還兵を迎えられなかった暗い時代を
想起させ、俄に重みを増してくるが、これ以
上深く作者の心中に踏み込めないのがもどか
しい。

毛布着て苦力^{くろ}かなし積まれゆく 加藤楸邨
犬抱ける水禍の民に祖国なし 久米幸麿
いつの世でも、いずこの土地でも、一番戦
禍を蒙るのは、いつも非戦闘員の庶民であ
る。今度の戦争でどれだけの人的被害が出る
か想像もつかないが、想像がつかないだけに
心が痛む。

以下、「日本大歳時記」の中から、私なり
の解釈で反戦句（厭戦句）らしきものを拾って
みた。かなり誤解している節があるだろうな
と思いつながら……。

石ぶみの後ろはくらき十二月	牧野麦刃
生きてあれ冬の北斗の柄の下で	加藤楸邨
雪霏々と舷梯のぼる眸 ^め ぬれたり	横山白虹
貨物車に馬とゐるなり耳袋	前崎待月
壮行や深雪に犬のみ腰をおとし	中村草田男
酷暑にも堪へつつ功を争はず	鈴木花蓑
正門に魂なき檄や夏休	半沢吾亦江
戦歿碑未だ古びず青芒	松崎鉄之介
戦 ^{たたか} に敗れ豚草のみおごる	上村占魚
喪主といふ妻の終 ^{つい} の座秋拾	岡本 眸
生き延びて来しこと大事菊枕	後藤夜半

（この項おわり）

○『浄土』表紙版画絵販売についての一案内

『浄土』三月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふ

（申し込み先）〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替（東京）八一八二二八七

話の旅 (八)

超常物語

⑤

まつ うら ぎょう しん
松浦行真

(浄土宗出版室長)

前号で、私自身が霊界（と取敢えず、ここでは呼んでおく）から通信を受けたことを記したが、その体験を私は、二人の学者に話した。

一人は、宮城音弥さんである。宮城さんは東京工業大学の名誉教授だが、岩波新書にも「超能力の世界」という著書を書いておられるのもわかるように、学

者としては珍しく超常現象にも強い関心と理解をお持ちのかたである。これは一つには、専攻にもよるだろう。宮城さんの専門は、心理学である。

心理学者といっても、霊（と、ここでも取敢えずそう呼んでおく）の問題を避けて通る人たちと直視するグループのふた手にわかれるが、宮城さんはその後者のほうであることはいうまでもない。（同じ心理学者でも、心を病む人たちの治療にたずさわっている新心理学者たちはまた別だと聞いた。新心理学者は決して霊の問題を素通りはしない。霊の解明が心の解明に通じるからだそうである。）

私の体験談を聞いて、宮城さんは、「そういう実話は無数にあるんですよ」

と言った。

実際、無数にある。

じつはそれまで私は、それらの話を耳にする機会があっても、うわの空で聞いていた。しかしあれ以後、しげんと注意をはらうようになってみるというと、世の中にはこんなにも不思議なことがあるのかと思うくらい、たくさんあった。

たとえば私の友人が、これまた友人の体験談として伝えてくれた、ちょっと筋の入り組んだ話に、こういうのがある。

その人は秋田に住む女性で、結婚することになったが、お父さんがすでに亡くなったので、まだ五十代で若いけれども、あとに母親一人が残ることになる。それで「スープの冷めない距離」で

はないけれども、未来の旦那さんに協力してもらって、鉄道線路を狭んでだが、実家の近くに家を借りて住むことにしたのである。

結婚して数年がたち、子どもも保育所に通うようになったある日、家で昼食の準備をしていると、電話のベルが鳴った。ところが受話器を取り上げて「モシモシ」というと、何も言わずに切れてしまう。

そんなことが二、三回続いた。

はじめのうちは何とも思わなかったが、三回目あたりから胸さわぎがし始め、四回目で居ても立ってもおられなくなって、自転車で駆けつけた。踏切にくるとあいにく遮断機が降りてくる。その

列車の通過が待ちどおしくてならなかったと、彼女はのちに回想したそうだ。

やっと実家にたどり着き、玄関の格子戸を開けて、びっくりした。秋刀魚だが何だが、魚を焼く煙で家中がいっぱいだったからである。あわてて台所に飛んで行くと、網の上のものは真っ黒だが、まだ赤い火が出ている。

「あらま母さん、何をしているのよッ」

と言いながらガスを止めようとして、彼女はつまづいた。調理中に卒中に襲われた母が、そこに倒れていたのである。

私はこの話を、体験者からじかに聞いたわけではない。その友人から聞いたのだが、友人が語るままと記した。踏切のくだりが何なんともリアルに感じられ

たので、手帳に書き留めておいたのである。

秋田の女性の体験談は、すでに書いたように、少し手がこんでいる。

彼女の母は、死を報せたかったのか、それともガスの火の始末を報せたかったのか。

おそらく、その両方であつたろう。

それが話を入り組ませたのかもしれないが、一般的には、この種の出来事はもっと単純であるものが多いようである。

筆者の体験も筋書きとしては単純だったが、筆者が十数年まえに、ある精神科医から聞いた体験談もそうであつた。その医師は中学のとき寄宿舎で寝ていたら、

夜中に父がものも言わずに入ってきた。驚いて「お父さん、今ごろどうしたんだ」と言ったら、そのままスッと消えたというのである。「チチ、シス」の電報が届いたのは、その翌日だったという。

しかし私はこの精神科医に、重大なことを聞き忘れた。背筋に氷を入れられたような、あのゾッとする感覚を覚えたかどうかを、聞き忘れたのである。

これは必ずしも、体験者すべてが覚えるものではないようだ。秋田の女性は、覚えていない。そのかわり彼女は、しだいに高まる胸さわぎを体験している。

興味深いというか、ちょっと面白い話をつけ加えておこう。

江戸中期の小説に、「雨月物語」というのがある。上田秋成が九つの短編で構成した怪異物語だが、その中に「菊花の約（ちぎり）」という一編がある。

主人公は丈部左門という播磨の国加古川に住む学者と、出雲の国松江の軍学者・赤穴宗右衛門である。赤穴は志賀への出張の帰り、加古川で大病にかかり、ふとした縁で左門の介抱をうけ、一命をとりとめ、二人は義兄弟の契りを結ぶ。そして赤穴はあらためて九月九日重陽の節句の日の再会を約し、国表に立ち帰る。

ところが当日、酒肴を取り揃えて左門は、母がたしなめるのも聞かず枝折戸しやうどを出たり入ったりして待つのだが、宗右衛門はいっこうに姿を現わさない。

午後が空しく去り夕べも過ぎて、中天にのぼった月も山の端に落ち銀河の光も薄れた頃おい、やっと赤穴が現れた。左門は喜びいさんで座敷に招じ、酒肴をすすめるが、赤穴は袖で顔を覆い、「私はこの世の者ではない。汚れに満ちた死霊が仮の人の姿をかりてあなたに会いにきたのだ」というなり、スーッと闇に消えてしまった。

じつは赤穴は、国に帰ったもののいろいろ事情があつて、新しく藩主となった尼子経久に軟禁され、とても約束の日に加古川へは行けぬと悟つて、古書に「人よく千里を行くことあたわず、魂よく一日に千里をも行く」とあるのを思い出し、約束の九月九日、自決して左門のもと

とに現れたのだった……。

私は『雨月物語』は、上田秋成が中国の怪異文学を翻案したりしていると何かで読んだことがあるので、「菊花の約」もそうなのだろうくらいにしか、思っていないかった。

ところが私の中学の同窓に、当時、千葉大学の教授をしていた赤穴宏君というのがいた。珍しい名だから先年、同窓会で会ったとき、「まさか『雨月物語』に出てくる赤穴宗右衛門の親戚じゃあるまいな」

と言ったら、

「直系の子孫だよ」

と言われたのにはびっくりした。そして宗右衛門のことは、

「うちじゃ代々、語りついできたんだよ」

「じゃあれは本当にあったことなのかい」

「本当だとも。ウソじゃないよ」

と言われて、二度、びっくりした。

尼子経久は、山中鹿之介の主君として知っている人のほうが多いかもしれないが、毛利元就もとむねをたびたび悩ました戦国時代の武将で、徳川幕府の成立よりも百年ほど早くに活躍している。そういう意味ではこの話は、まさに超常物語の古典といえるかもしれない。

話が横道にそれたが、超常現象（超常能力も同様であるが）はだいたいにおいて、六つの種類にわかれるそうである。

念写、念力、第六感、予知、透視、靈媒

の六つである。

われわれの日常において、もし接するとしたら、このうちの第六感にぞくするテレパシーが、もっとも多いようである。テレパシーは精神感応と訳されて、どの超常現象にも伝達手段として現れてくるが、一種の通信と考えていいだろう。この通信の特徴、つまりテレパシーの特徴は、肉親者には通じやすいという性質があるらしい。秋田の女性の場合も、精神科医の体験も、いずれも対象は母であり父であった。私の場合は肉親関係はなかったが、宗教を媒体として、和尚と檀徒という、死をめぐるのもっとも密接な

関係にあったといえよう。

浄土宗総合研究所の布教部長をなさっている板垣隆寛さんにうかがった話だが、板垣さんが本堂で念仏をしていると、知らぬ間に後ろにすわって一緒に念仏を唱えている人がいる。はて、いつの間にか思い、終わって声をかけようとすると、もう消えて、誰もいない。しばらくすると、誰それが亡くなったという報告が、家族からとどく——そんな経験が、二、三度あったそうである。

これなども、筆者と同じケースであろう。

肉親であるとか親密の過疎とかは、電波（かどうかしらないが、その波長みたいなものの一致もしくは近似関係があるの

かもしれない。

こういう実験があるという。

親ウサギと子ウサギを隔離して、子ウサギを一匹ずつ殺していったら、わが子がそんな目にあっているなどとは知るはずもないのに、同じ時間に、母ウサギの脳波が異常を示した……。

なんだか背筋の寒くなるような話だが、肉親の場合はテレパシーが通じやすいという一つの例証である。

しかしこれで見ると、テレパシーは人間だけのものではないようだ。

宮城さんによると、超常能力にかけてはむしろ動物のほうが、人間よりも一枚上だという。犬や伝書鳩の帰巢本能とか、ネズミが難破する船から最終の港で

逃げ出すといった、予知能力などがそうである。

昔は人間ももっとふんだんに超常能力をもっていたらしい。たしかに今でも、かのタイタニック号の沈没や、ケネディ大統領の暗殺を予知した人がいないわけではない。しかしそれは特別な能力を持った人の場合であって、誰にでもできることではない。一般的には人間の超常能力は、頭脳の発達と引き替えに、退化していったのではないかと言われている。

そういえば、最近では家への道を忘れて、帰ってこない犬がふえているという。これもペットの過保護が生んだ退化なのだろうか。

(以下次号)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや雑感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十七巻 三月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

平成三年二月二十五日 印刷
平成三年三月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷 鈔

東京都千代田区飯田橋一十一一六
発行所 法然上人讃仰会

電話〇三(三三六二)五九四四
〒一〇三 (振替)東京八一八二一八七

新刊

上人 法然 浄土三部経講説

B 6判五四二頁
価四、五〇〇円

法然上人撰述の無量寿経釈、観無量寿経釈、阿弥陀経釈の原典を訓読註解して和訳し、更に和字三経釈の原典を註解和訳したものを加え、本宗所依の経典に対する宗祖の明解な義解を記す

浄土宗勤行の解説

B 6判三六六頁
価三、六〇〇円

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B 6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B 6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B 6判八四七頁
価六、八〇〇円

解説

和訳 浄土三部経

B 6判四七四頁
価二、五〇〇円

訓読

和訳 法然上人 選 択 集

B 6判三八七頁
価二、五〇〇円

典の四

和訳 善導大師 観経四帖疏

B 6判五八四頁
価三、五〇〇円

原典

和訳 善導大師 六時礼讃

B 6判二六五頁
価二、四〇〇円

○ 葉書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）

編と訳 村 瀬 秀 雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常 念 寺

電 話 0465-43-1352

振 替 横 浜 3-8296 番

第五十七卷

三月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
平成三年二月二十五日印刷 平成三年三月一日発行